

Song Review 4 #Fragile

『#Fragile』(sting、1987年)を取り上げる。本作は、1987年、中米ニカラグアでの内戦の最中、水力発電プロジェクトに従事していた米国人技師が武装勢力に殺害されたのを知った Sting はこの事件に衝撃を受け、彼への追悼として本曲を書いたという。

私が本曲に接したのは Cassandra Wilson (2003年のアルバム『Glamoured』に収録) によるカバーである。彼女は、Sting の原曲をジャズとソウルの深みで再解釈して歌っている。アコースティックギターとウッドベースを中心に、繊細で温かみのあるサウンドである。黒人音楽の伝統と精神性を感じさせるアプローチで、その歌唱は、Sting の反戦メッセージをより個人的で霊的な祈りとして昇華している。特に、米国の社会的文脈(戦争、差別、暴力)において、彼女の『Fragile』は静かな抗議と癒しの歌として受け止められているようだ。

If blood will flow when flesh and steel are one
Drying in the color of the evening sun
Tomorrow's rain will wash the stains away
But something in our minds will always stay

(肉体に鋼が突き刺さり、血が流れても
それは夕日の色に染まり、やがて乾くだろう
そして、明日になれば、雨が血痕を洗い流すだろう
しかし、私たちの心に刻まれたものは、永遠に消えはしない)

この歌詞は、暴力の痕跡が物理的には消えても、心に残った痛みや記憶は消えないというメッセージを伝えている。その後続く歌詞の「How fragile we are (僕たちはこんなにも脆い)」というフレーズは、戦争やテロ、災害のニュースを聞くたびに人々の心に響きわたる。

9.11 同時多発テロ事件後にも本曲は追悼式典などで演奏されることが多いという。多くのアーティストにカバーされ、ジャンルを超えて愛される楽曲となっている。sting 自身もコンサートでアンコールの定番として演奏し続けている。この曲は、単なる音楽作品を超えて、倫理的・象徴的な問いかけを含んだ「祈りのような歌」となっている。

sting の代表的な名曲

『#Englishman in New York』

Quentin Crisp (1908-1999) (英国出身の作家・俳優・ゲイ活動家がモデル) はロンドンで同性愛が違法だった時代に公然とゲイであることを表明し、社会的に異端視されながらも独自の美学と哲学を貫いた人物である。晩年にニューヨークへ移住したが、米国では「異邦人」として生きる姿勢を貫いた。スティングは彼と出会い、彼の生き方に感銘を受けてこの曲を制作したそう。

「Be yourself, no matter what they say (誰が何と言おうと、自分らしくあれ)」というフレーズは、クリスピの生き方そのもの。ジャズ、レゲエ、ポップが融合した独特のサウンドで、サックスはブランフォード・マルサリス、ドラムはマヌ・カチェが担当している。

『#Shape of My Heart』

この曲は、1993年にスティングが発表したアルバム『Ten Summoner's Tales』に収録された楽曲で、ギタリストのドミニク・ミラーとの共作によって生まれた。その後、1994年公開の映画『レオン』(孤独と愛、喪失を描く物語)のラストシーンとエンドロールで使用されている。カードゲームを通して人生や運命、確率といった抽象的な概念を探求する人物の内面を描いている。表面的な勝敗ではなく、人生の深層にある意味や構造を探る姿勢を象徴している。

評価：★★★★★